諸國万句（承應元年印本、三之卷十句第四、）

前句　手ぎわにほりし家のかうがい　正之

附句　上臈はいとゞふりよき髪のわげ　信親

玉海集（明暦二年印本、一靈軒安原貞室撰、春の部一の卷、）

おのが枝をかうがいにさせ柳髪　行正（○略中）

女用訓蒙圖彙、貞享四年印本卷之三所載、かうがいわげの圖、（○略圖）是より古きもの未見、笄のかたち楊枝の如し、西鶴大鑑一之卷、銀の笄を楊枝にさしかへ云々といへるも考べし、物類稱呼四之卷に掃、參河及遠州にてほせと云々、（春明云）今も此五十瀬の國（○伊勢）には、木にもあれ、竹にもあれ、小さく扮しをほせくらといへるもおもふべし、

笄製作

〔諸家奥女中袖鏡〕髪飾の事

一掃枝（かうがい）は御三の間以上、朝鮮形か、具なり形を用ふ、

一同じ老若女の外は、角形にく太く短き品をも用ゆ、

一御廣式附若き女中は、角形にて差込の花小さきを用ゆ、

一兩添、後ろ指、總女中とも禁ず、

一掃枝は、御使番以下、角形にて長く目だつ品をば用ゆ、

〔雲萍雜志三〕洛の燈籠菴は、そのむかし小松内府（○平重盛）の燈籠を造られし所なれば、その名殘れりとぞ、六波羅より東南にあたりて小高きところなり、あるとき家をつくるとて、そのあたり掘けるに、笄の如きもの多く出たり、赤がねにしてその形丸く、左右に圓く合せたる玉の如きもの附たり、一尺あまりあり、予（○柳澤淇園）が友文鎮に玄たるを見たり、古雅いはんかたなく至ておもし、往昔の質素たるをおもひやるべし、